

プロジェクトの沿革

1 2008 年度のプロジェクトの組織

2008 年度も昨年度と同様に、4つの研究グループに分かれて活動を行った。各研究グループの構成については以下に、日本人・外国人の順で、それぞれ五十音順およびアルファベット順に列挙する。なお、*はコアメンバーで、所属は2008年度当時のものである。

【プロジェクトリーダー】

長田 俊樹 総合地球環境学研究所・教授（言語学）

【古環境研究グループ】

岡村 眞 高知大学教育研究部自然科学系・教授（地学）
 奥野 淳一 国立極地研究所・特任研究員（地震学）
 鼎 信次郎 東京大学生産技術研究所・准教授（土木工学）
 熊原 康博 群馬大学教育学部・講師（自然地理学）
 久米 崇 総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（水文学）
 竹内 望 千葉大学大学院理学研究科・准教授（雪氷生物学）
 堤 浩之 京都大学大学院理学研究科・准教授（地球物理学）
 長友 恒人 奈良教育大学教育学部・教授（年代測定学）
 中野 孝教 総合地球環境学研究所・教授（資源環境地質学）
 前杢 英明* 広島大学大学院教育学研究科・教授（自然地理学）
 松岡 裕美 高知大学教育研究部自然科学系・准教授（地質学）
 宮内 崇裕 千葉大学大学院理学研究科・教授（地形学）
 八木 浩司 山形大学地域教育文化学部・教授（変形地形学）
 横山 祐典 東京大学海洋研究所・准教授（気候変動学）

【生業研究グループ】

宇田津 徹朗 宮崎大学農学部附属農業博物館・准教授（農学）
 大田 正次* 福井県立大学生物資源学部・教授（農学）
 河瀬 眞琴 農業生物資源研究所・研究主幹兼基盤研究領域ジーンバンク長（農学）
 木村 李花子 馬事文化研究所・所長（生物学）
 小坂 康之 総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（民族植物学）
 佐藤 洋一郎 総合地球環境学研究所・教授（植物遺伝資源学）
 千葉 一 東北学院大学・非常勤講師（経済学）
 藤本 武 人間環境大学人間環境学部・准教授（文化人類学）
 三浦 励一 京都大学大学院農学研究科・講師（農学）
 森 直樹 神戸大学大学院農学研究科・准教授（植物遺伝学）
 湯本 貴和 総合地球環境学研究所・教授（生態学）
 P.P. Joglekar デカン大学考古学科・准教授（動物考古学）
 A.K. Pokharia ビルバル・サハニ古植物学研究所・准教授（植物考古学）
 S. Weber ワシントン州立大学・准教授（DNA 考古学）

【物質文化研究グループ】

上杉 彰紀	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
宇野 隆夫*	国際日本文化研究センター・教授（考古学）
小磯 学	神戸夙川学院大学観光文化学部・准教授（考古学）
酒井 英男	富山大学大学院理工学研究部・教授（地球科学）
丹野 研一	山口大学農学部・助教（考古学）
寺村 裕史	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
山口 欧志	国際日本文化研究センター・機関研究員（考古学）
J.M. Kenoyer	ウィスコンシン大学人類学部・教授（考古学）
J.S. Kharakwal*	ラージャスターン・ヴィディヤपीード大学・准教授（考古学）
Q.H. Mallah*	シャーハ・アブドゥル・ラティーフ大学・教授（考古学）
F. Masih*	パンジャーブ大学考古学科・教授（考古学）
V.S. Shinde*	デカン大学考古学科・教授（考古学）

【伝承文化研究グループ】

永ノ尾 信悟	東京大学東洋文化研究所・教授（インド学）
大西 正幸*	総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（言語学）
児玉 望	熊本大学文学部・准教授（言語学）
後藤 敏文*	東北大学大学院文学研究科・教授（インド学）
高橋 孝信	東京大学大学院人文社会系研究科・教授（インド学）
高橋 慶治	愛知県立大学外国語学部・教授（言語学）
堂山 英次郎	大阪大学大学院文学研究科・講師（インド学）
外川 昌彦	広島大学大学院国際協力研究科・准教授（文化人類学）
藤井 正人	京都大学人文科学研究所・教授（インド学）
前川 和也	国士舘大学 21 世紀アジア学部・教授（西アジア史）
松井 健	東京大学東洋文化研究所・教授（文化人類学）
森 若葉	総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（言語学）
山下 博司	東北大学大学院国際文化研究科・教授（インド学）
A. Parpola	ヘルシンキ大学・名誉教授（インド学）

【プロジェクトメンバー外協力者】

伊藤 孝	伊藤地質コンサルティング・代表（考古地磁気学）
岸田 徹	同志社大学文化情報学部・実習助手（考古地磁気学）
小茄子川 歩	デカン大学大学院考古学科・PG ディプロマ課程（考古学）
斎藤 成也	国立遺伝学研究所・教授（遺伝学）
下岡 順直	奈良教育大学教育学部大学院・研究員（年代測定学）
高宮 いづみ	近畿大学文芸学部文化学科・准教授（考古学）
竹内 侑子	富山大学大学院理工学教育部・修士課程（考古地磁気学）
A. Kashyap	ワシントン州立大学大学院・研究員（DNA 考古学）

2 2008 年度のプロジェクトの活動

A 全体の活動

インダス・プロジェクトは2008年度に本研究（FS）2年目を迎えた。このインダス・プロジェクトの成果報告書も2回目の出版である。インダス・プロジェクトが立ち上がってから本研究1年目までの活動については、昨年度の成果報告書をみていただくことにし、まず今回は2008年度の全体活動について述べてみたい。

具体的な活動報告に入る前に、このプロジェクトの研究体制について復習しておこう。われわれのプロジェクトは次の4グループからなる。

- (1) 古環境研究グループ（Palaeo-Environment Research Group=PERG）
- (2) 物質文化研究グループ（Material Culture Research Group=MCRG）
- (3) 生業システム研究グループ（Subsistence System Research Group=SSRG）
- (4) 伝承文化研究グループ（Inherited Culture Research Group=ICRG）

それぞれのグループにはコアメンバーがいる。そのうち、日本側メンバーの名前をあげると、(1)は前杵英明・広島大学教授、(2)宇野隆夫・国際日本文化研究センター教授、(3)大田正次・福井県立大学教授、(4)後藤敏文・東北大学教授である。(4)はさらにインド学グループと言語学グループに分かれるため、前者の代表が後藤教授で、後者の代表としてコアメンバーに入っているのが大西正幸・総合地球環境学研究所上級研究員である。それぞれのグループの活動報告については、これらのコアメンバーによっておこなわれるので、ここではそれぞれのグループの活動以外のインダス・プロジェクト全体にかかわるような出来事を中心に報告してみた



プロジェクトのコンセプト

い。

まず、4月上旬から7月上旬までの3カ月、インドのグジャラート州ヴァドーダラーにある、マハーラージャ・サヤジラーオ大学（Maharaja Sayajirao University of Baroda）のアジートプラサード准教授が、招へい外国人研究員として地球研に滞在した。そして、グジャラート州のインダス文明遺跡について研究を進めるとともに、日本の考古学の研究成果を大いに吸収されていかれた。このアジートプラサード博士の口添えで、10月には宇野教授と寺村研究員がマハーラージャ・サヤジラーオ大学でGISの授業と遺跡における実習をおこなったが、こうした交流に発展したことは、インドに長くいたプロジェクトリーダーとしては喜ばしい限りである。このプロジェクトが終わった後も、こうした交流が続くことを願ってやまない。

5月のゴールデン・ウィークが終わった、5月7日から2日間にわたり、ハーバード大学のヴィッツェル教授の主宰する、南アジアの民族生成に関するラウンドテーブルが開かれた。これに、地球研から佐藤教授と長田が参加し、長田はインダス・プロジェクトの紹介をおこなった。ハーバード大学には、ハラッパー遺跡考古学研究プロジェクトの重鎮、メドウ博士がいるが、学会で中国へ行くということで、佐藤教授の発表を聞いただけで、残念ながら長田の発表は聞かれなかった。しかし、次回の国際シンポには参加してくださる約束をして別れた。5月末には、延び延びになっていた、イランでの南アジア考古学会が開催され、宇野教授と上杉研究員が参加した。それぞれがインダス・プロジェクトでの発掘成果を発表された。さらに、時間的にはずっとあとになるが、10月には、アメリカのウィスコンシン大学で毎年この時期におこなわれる南アジア学会に上杉研究員が参加し、われわれがおこなってきた発掘成果の一部を発表された。こうした海外での学会や研究会において、今後も積極的に研究成果を発表し続けていく予定である。

6月7日と8日には、地球研で「古代文明社会の交流 前3千年期におけるインダスとイランの交流」と題する国際シンポジウムを実施した。前年度に上杉研究員、寺村研究員、長田の地球研メンバーがイランを訪問したとき出会った、ジーロフト遺跡の発掘責任者のマジードザーデー博士と、イラン考古局のファゼリ博士を招待し、イランからアフガニスタン、パキスタンにおける古代文明の交流をめぐる国際シンポとなった。これらの地域で発掘をおこなっている、フランスのベセンヴァル博士、ドイツのウテ・フランケ博士、アメリカのケノイヤー博士、かつて地球研の招へい外国人研究員だった、フィンランドのパルポラ教授らを招待しておこなわれた。なお、マジードザーデー博士とベセンヴァル博士はご夫人を伴っての来日であった。とくに、マジ



発掘報告会



国際シンポジウム

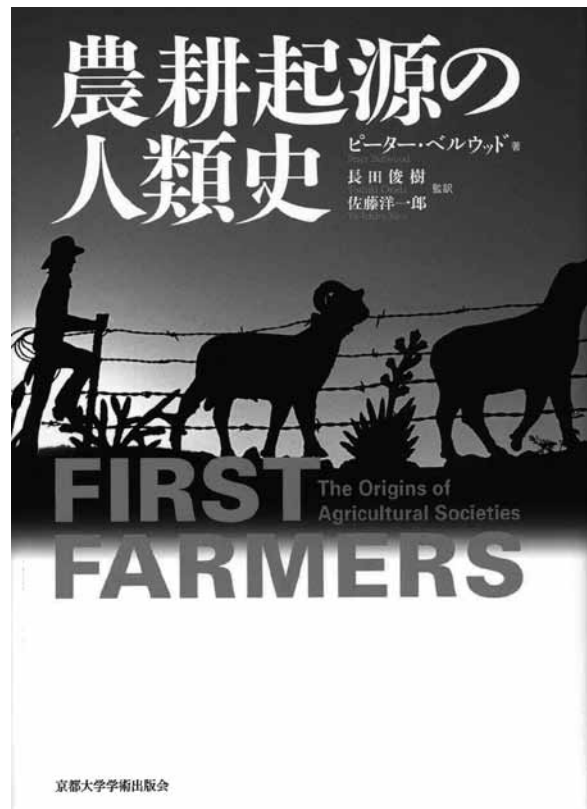
ードザーデー博士ご夫妻は、会議の一週間以上前にお見えになり、ジーロフト遺跡から見つかった新しい文字について、京都大学百年記念館で重要な発表をおこなってくださった。このことを、感謝の意を込めてここに特記するしだいである。

国際シンポジウムの前日には、発掘報告会として、現在インダス・プロジェクトがおこなっている2か所の発掘遺跡、グジャラート州のカーンメール遺跡とハリヤーナー州ファルマーナー遺跡の成果報告がおこなわれた。前者の報告をわれわれのコアメンバーであるカラクワール博士がおこなう予定であったが、残念ながら来日されなかったため、上杉研究員が急きよ代役をつとめた。招へい外国人研究員のアジートプラサード博士にも、グジャラート州シカールプル遺跡の発掘報告を依頼し、快諾していただいた。

なお、コアメンバーである、パキスタンのマッラー博士にも、発掘報告会で発表していただく予定だったが、パキスタンから出国する許可が下りず、参加できなかった。ふだん、交流がなかなか難しいインドとパキスタンの考古学者が、一同に集う場を設定したかったのだが、それが実現できなかったことは返す返す残念である。

インダス・プロジェクトと直接かかわらないが、佐藤教授と長田が監訳した『農耕起源の人類史』（原題は『First Farmers』）が出版され、6月23日に、著者であるピーター・ベルウッド・オーストラリア国立大学教授をお招きして出版記念会がおこなわれた。この翻訳のきっかけは、われわれのプロジェクトと佐藤プロジェクトが共同で開催した、2005年のハーバード大学との共同ラウンドテーブルにベルウッド教授が参加されことにあるので、あえてここで紹介しておく。なお、ベルウッド教授は地球研評価委員会の評価委員でもある。

インドでの発掘は順調だが、パキスタンでの発掘がなかなか進まない。そこで10月5日から24日まで、長田がパキスタンに行き、パキスタンの状況調査をおこなった。まず、最初の計画であったガンウェリワラー遺跡の発掘について、イスラマバードのパキスタン考古局やラホール大学のマシー教授にお聞きしたところ、政治的状況が悪化のため許可がおりず、このインダス・プロジェクトでの発掘は断念することにした。いっぽう、シンド州にあるシャーハ・アブドゥル・ラティーフ大学については、ニローファー・シェイフ学長が考古学者であることと、なんとかパキスタンでのパイプをつないでおいたほうがよからうという判断から、今後の共同研究を目指し、MOUを結ぶことで合意を取り付けた。MOUは学長の来日時におこなうこととし、最終的には2009年6月にMOU締結式がとりおこなわれた。MOUの締結前に何もしないのは、プロジェクトの時間的制約を考えると、何もできなくなってしまう危険性があるため、とりあえずは発掘測量に使用するトータル・ステーションを購入し、パキスタン側で使っていただくことにした。そのトータル・ステーション



を宇野教授が12月に届け、短い期間ながら、基本的な使い方などの指導をおこなった。

2008年度の後半は、地球研のプロジェクト研究発表会と、評価委員会での発表および中間評価が待っていたため、その準備に専念した。そのため、まず日本人研究者だけを集めて、全体会議を11月29日と30日におこなった。初日はそれぞれの研究グループからの報告と評価委員会に向けての対策を協議した。2日目はインド学グループに、サンスクリット文献にあらわれる焼き畑などの農耕をサラスヴァティー川についての発表をしていただき、それらのテーマをめぐって活発な議論がかわされた。プロジェクトの個々の研究グループ同士間の交流を図る目的でおこなわれたが、まずまずの出来だったと評価している。

年末恒例のプロジェクト研究発表会は、地球研で現在走っているすべてのプロジェクトが参加して、3日間にわたって開かれる。2008年度は12月10日～12日におこなわれた。基本的に、評価委員会にかかるプロジェクトについては発表15分、質疑30分、それ以外は発表15分、質疑15分でおこなわれる。本年度の発表はとどこおりなく終わった。

研究発表会よりもはるかに大変なのが評価委員会である。今年は2月19日、20日の両日にわたっておこなわれた。一番大変だったのは、評価委員会に提出する、プロジェクトの研究内容等をまとめた研究レポートである。研究レポートは英文で書くことが要求される。枠組みはある程度用意されているのだが、2008年度は例年に比べてその量のはるかに多く、大西、森の両上級研究員が手伝ってくれなければ、正直言って、一人ではとても書ききれなかった。この締め切りが1月年明けすぐだったので、暮はその執筆に追われ、大みそかにも三人で会って、レポートと格闘することになった。その甲斐あって、評価委員がそのレポートを丹念に読んでくれたため、結果的に長田の発表での失敗を十分にカバーしてくれた。なお、このレポートの内容は皆さんにもぜひ読んでいただきたいので、この2008年度プロジェクト報告書に転載しておく(17-36頁参照)。

評価委員会当日は、オブザーバーとして大西・森上級研究員が見守るなか、パワーポイントを使って発表をおこなった。湯本教授のアドバイスもあって、プレゼンで気をつけたのは以下の二点である。前回の評価委員会の指摘をどう反映させているかを強調することと、中間評価なので、ある程度の成果を示すことの二点である。発表自体はそれほど問題がなかったのだが、質疑応答がとても問題だった。というのも、インド洋ダイポール現象などへの質問に対し、長田は「私は専門ではないので」という言葉を二度も繰り返してしまったことである。評価委員会に参加していた佐藤教授にもその点を叱責された。今後の発表ではぜひ気をつけたい。結局、中間評価にかかった5つのプロジェクトすべてに対し、とくに研究年数を短くするとか、予算を削るといった評価は出ず、インダス・プロジェクトも含めたすべてのプロジェクトは、あと3年間続けられることになった。これもプロジェクトメンバーのご支援ご協力の賜物である。この場を借りて感謝したい。

ところで、長田が評価委員会で頭を悩ませている間も、インドでは発掘が続けられた。一番長田の記憶に残ったのは、3つも同じインダス印章を刻印したペンダント状のものがカーンメール遺跡からみつかったことである。それは、2009年4月の読売新聞にもとりあげられたが、パスポートのようなものではないかと思っている。また、ファルマーナー遺跡で、大規模な墓地が見つかったことも印象深い。遺跡は掘ってみないとわからない部分がどうしても残るが、結果的に、今回プロジェクトで発掘した遺跡はどちらもすばらしい遺跡だったといえるのではないだろうか。発掘をおこなう立場ではないが、プロジェクトリーダーとしてはホッと胸をな

でおろしているところである。

最初に述べたように、それぞれの研究グループの活動はコアメンバーの方々を中心にご報告いただく。そこで、プロジェクト成果報告書という媒体にはそぐわないのではないかというご指摘を受けるのを承知のうえ、ここではかなり長田の私的な感想を交えながら、プロジェクト全体にかかわる活動について報告したしだいである。

(文責 長田俊樹)

B 古環境研究グループの活動

古環境研究グループは2008年度から本格的な現地調査を開始した。まず、ガッガル川の流路・河況変化を調査するサブグループ（前杓、長友、下岡）は2008年11月30日～12月15日まで、インド・ハリヤーナー州、ラージャスターン州に広がる河畔砂丘の分布調査と、砂丘砂、およびガッガル川河成堆積物の粒度分析用試料およびOSL年代測定用試料を採取した。前杓は2009年2月にもハリヤーナー州のファルマーナー遺跡を訪問し、遺跡直下の土壌と年縞測定用試料を採取した。

グジャラート州沿岸部で完新世中期以降の相対的海面変化と遺跡の分布調査をするサブグループ（宮内、松岡、前杓）は2008年12月1日～13日、2009年2月18日～28日にグジャラート州沿岸部のカーンメール遺跡近辺で沿岸堆積物の掘削調査を行った。機材のトラブルで本格的な掘削調査は次年度以降に行うことになったが、リトルランや沿岸の湖沼、河成、海成堆積物を粒度分析用に採取し、持ち帰った。

ヒマラヤ前縁帯の先史時代の地震活動と遺跡分布について調査するサブグループ（熊原）は2009年2月26日～3月8日に、インド・パンジャブ州、ヒマーチャル・プラデーシュ州のヒマラヤ前縁帯活断層に沿って踏査し、地震活動履歴が復元できそうなトレンチ調査候補地を数ヶ所選定した。本格的なトレンチ調査は次年度行う。

その他、次年度に行う予定のヒマラヤ前面の古環境復元のための湖沼堆積物掘削調査のための下準備として、2009年3月13日～3月21日まで、前杓と八木がネパール・カトマンズのトリブーバン大学などを訪問し、現地の研究協力者であるトリブーバン大学ダンゴル教授と調査手続きについて打ち合わせを行った。

(文責 前杓英明)

C 生業研究グループの活動

2008年9月から10月の2週間、大田、千葉、森、藤本がタミル・ナドゥ州シェベロイ・ヒル（Sheveroy Hills）とカルナータカ州トゥンクール（Tumkur）周辺において、エンマーコムギの栽培、利用に関する調査を行った。シェベロイ・ヒルの調査は、タミル・ナドゥ農業大学（Tamil Nadu Agricultural University）のN. Senthil博士の協力と同行を得て実施した。栽培者に会うことはできなかったが、シェベロイ・ヒル南西部のエルカード（Yercaud）でエンマーコムギ（samba-godi）の栽培が今でも行われていることを確認し、呼称、栽培時期、脱穀法、調理法に関する聞き取りを行った。カルナータカ州では、アーンドラ・プラデーシュ州との州境のマドギール近くのI. D. Hariでエンマーコムギの栽培を確認した。呼称はjava-godiであり、これまで調査したタミル・ナドゥ州ニールギリ・ヒル（Nilgiri Hills）や上記のシェベロイ・ヒルとは異なる呼称で栽培されていた。脱穀はニールギリ・ヒルと同様に地面に埋めた小さな石臼

に小穂を入れ縦杵で搗いて行うことが明らかとなった。加えて、千葉はこの調査に先立ち、9月中旬にマイソール大学、カンナダ大学および西ガーツにおいて本年度調査のための予備調査と準備を行った。

2009年1月下旬の1週間、三浦がカーンメール遺跡周辺において、冬作物の作目調査を行った。また、2月初旬の1週間、千葉と三浦がカルナータカ州中部のバッラーリ（Bellary）周辺で収穫期のエンマーコムギ（java-godi）の調査を行った。

昨年度のニールギリ・ヒルでの調査結果と合わせて、インド西南部の広範な地域で現在もエンマーコムギが、他のムギ類とは異なる呼称で呼ばれ日常の作物として栽培・利用されていることが明らかとなった。

（文責 大田正次）

D 物質文化研究グループの活動

物質文化研究グループでは、カーンメール遺跡（Kanmer）およびファルマーナー遺跡（Farmana）の発掘調査および関連データの収集を中心に活動を行った。以下、その詳細を実施順にまとめておく。

まず、2008年4月2日～16日に上杉が前年度に行った調査の補足としてファルマーナー遺跡において発掘資料の記録化を実施した。その後、上杉は4月17日から4月26日にはパキスタン・シンド州ハイルプルに所在するシャーハ・アブドウル・ラティーフ大学考古学科（Shah Abdul Latif University, Khairpur）を訪れ、シンド州内の遺跡から採集された土器・石器の記録化を実施するとともに、既知のインダス遺跡の見学を行なった。

上杉は2008年5月20日～31日にイランを訪れ、テヘラーン国立博物館（Iran National Museum）での資料調査およびシーラーズで開催された第2回南アジア考古学会（Society of South Asian Archaeology）に参加し、“A Note on the Significance of the Kulli Culture for Bridging the Indus Valley and the Iranian Plateau”と題した研究発表を行なった。また、同学会には宇野も参加し（5月23～28日）、“Archaeology with GIS at the Harappan site of Kanmer, Gujarat, India”と題した研究発表を行った（寺村および近藤康久との共同発表）。

上杉は2008年9月1日～10月9日にインドに出張し、ハリヤーナー州ローフタク所在のマハーリシ・ダヤーナンド大学歴史学科（Maharshi Dayanand University）、グジャラート州ヴァドーダラー所在のマハーラージャ・サヤジラーオ大学考古・歴史学科（Maharaja Sayajirao University of Baroda）、マハ



2008年度カーンメール遺跡調査風景



2008年度ファルマーナー遺跡調査風景

ーラーシュトラ州プネー所在のデカン・カレッジ (Deccan College)、ラージャスターン州ウダイプル所在のラージャスターン・ヴィディアピート考古学科 (Rajasthan Vidyapeeth) において、ファルマーナー遺跡、カーンメール遺跡および関連遺跡の出土遺物の記録化を実施した。

上杉は 2008 年 10 月 14 日～26 日にアメリカ合衆国ウィスコンシン州マディソン所在のウィスコンシン大学マディソン校 (University of Wisconsin-Madison) を訪れ、南アジア・センター (Center for South Asia) および第 37 回南アジア学会 (Annual Conference on South Asia) においてカーンメール遺跡およびファルマーナー遺跡の発掘調査成果について口頭発表を行なった。

宇野は 2008 年 12 月 19 日～27 日にパキスタン・シンド州所在のシャーハ・アブドゥル・ラティーフ大学を訪れ、共同研究機関である考古学科にトータル・ステーション一式を渡し、その使用方法等に関する説明を行なった。また、シンド州内の既知のインダス遺跡を巡検した。

上杉は 12 月 15 日～24 日にインドのデカン・カレッジにおいて、ファルマーナー遺跡出土資料の記録化を実施した。その後、オリッサ州ブバネーシュワルで開催されたインド考古学会 (Indian Archaeological Society) に参加し、現地研究者と情報交換を行なった。その後 2009 年 1 月 7 日～3 月 10 日および 3 月 17 日～3 月 31 日にはファルマーナー遺跡の第 3 次調査に参加した。その間、1 月 25 日～1 月 31 日にはカーンメール遺跡の発掘調査を見学するとともに、グジャラート州サウラーシュトラ半島に所在する既知のインダス遺跡の巡検を実施した。

宇野・寺村は 2008 年 10 月 1 日～14 日にグジャラート州ヴァドーダラー所在のマハーラージャ・サヤジラーオ大学考古学科において、同大学学生を対象に GIS の活用方法に関する集中講義を行なった。また、あわせてヴァドナガル (Vadnagar) 遺跡およびライプル (Raipur) 遺跡においてトータル・ステーションを使った測量実習を実施した。

宇野・寺村・山口は 2009 年 2 月 4 日～3 月 2 日にかけてファルマーナー遺跡およびカーンメール遺跡の発掘調査に参加した (山口は 2 月 15 日まで)。この調査には伊藤孝 (伊藤地質コンサルティング)、岸田徹 (同志社大学文化情報学部)、竹内侑子 (富山大学大学院) が同行し (2 月 8 日～23 日)、岸田が GPR 探査およびセシウム磁力計による磁気探査を、伊藤・竹内が考古地磁気測定のためのサンプル採取をファルマーナー遺跡およびカーンメール遺跡で実施した。また、宇野は 3 月 22 日～3 月 29 日に高宮いづみ (近畿大学文芸学部・准教授) とともにファルマーナー遺跡およびカーリーバンガン遺跡の巡検を実施した。

小磯は 2008 年 12 月 24 日～2009 年 1 月 7 日にインド・グジャラート州ヴァドーダラー所在のマハーラージャ・サヤジラーオ大学考古学科を訪問し、グジャラート州内のインダス遺跡から出土した紅玉髓製ビーズの実見調査を行った。また、現在も紅玉髓製ビーズの生産工房が残るカーンバートを訪問し、製作技術等の記録を行なった。

同じく小磯は 2009 年 2 月 15 日～2 月 28 日にカーンメール遺跡およびファルマーナー遺跡を訪問し、発掘調査を見学した。

Steven A. Weber は 2009 年 2 月 20 日～3 月 1 日にファルマーナー遺跡を訪れ、植物依存体のサンプル採取を実施した。また、2009 年 1 月 19 日～3 月 23 日には Weber の共同研究者として Arunima Kashyap (Washington State University) がファルマーナー遺跡で植物依存体のサンプル採取を実施するとともに、マハーラーシュトラ州プネー所在のデカン・カレッジおよびコルカタ所在の古植物博物館で関連データの収集を行なった。

上杉は 2009 年 3 月 15・16 日に古代オリエント博物館 (東京・池袋) で開催された第 16 回西アジア発掘調査報告会にてカーンメール遺跡およびファルマーナー遺跡の発掘調査成果につ

いて発表した。

(文責 宇野隆夫・上杉彰紀)

E 伝承文化研究グループの活動

伝承文化研究グループは、インド学研究班と言語研究班に分かれるため、ここではそれぞれの活動を分けて報告する。

E-1 インド学研究班

インド学研究班は、引き続き、ヴェーダ文献学、古典インドアーリヤ語文献学、タミル語をはじめとするドラヴィダ語圏文献研究、現代インドの地域研究（文化人類学）などにわたり、「環境変化とインダス文明」という視点から個別研究を深めている。文献に在証される動植物、生産技術、物品名などは当時の生活環境の復元と、諸部族の動向、相互関係などの確認に欠かせない情報であり、特にその精査に努めている。「牛」を意味する単語をとってみても、雄雌、年齢、仔牛をもうけたことがあるか否か、繁殖能力の程度、利用目的などによって種々の呼称があり、古い文献（ヴェーダ、仏典など）に基づいてそれらを確定する作業からは、多くの、また、奥深い知見が得られる。現在、このような家畜を中心とした諸概念の確認と、動植物一般への言及の精査に重点を置いている。それらの情報を信頼できる形にまとめ、考古学、地理学、言語学を中心とする各班の成果と相互検証することを目指している。インダス文明当時の生産方法、道具、習俗、衣装などの中には、現在まで各地に残るものの多いことが指摘されているが、文化人類学他のフィールド研究者による事実確認と収録、考古学関係者との摺り合わせも課題である。このような研究動向は、広く世界の学会に見られるようになっており、2008年度までの成果の一部は、ドイツで開催される文献学、言語学、考古学を総合する学会で発表予定である。次年度には、地理学、考古学の現地調査にも参加を予定している。

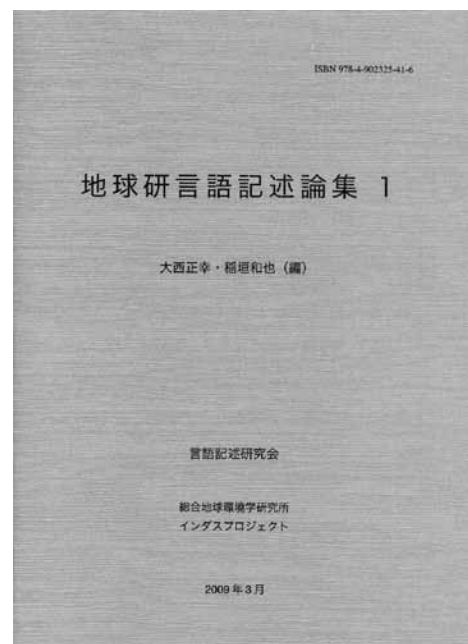
(文責 後藤敏文)

E-2 言語研究班

言語研究班は、2007年度に引き続き、2008年度も、「インダス言語研究会」と「言語記述研究会」の二つの研究会を定期的に関き、南アジアの諸言語の記述と比較研究と『南アジア言語地図』の作成を中心に活動を行ってきた。この他にも、二つの研究会の共催で海外の3人の専門家を招いての歴史言語学の現在に関する講演会を開き、また、「インダス言語研究会」のメンバーが熊本大学に出張して、インドの文字と文明をテーマとするセミナーを開催した。また、年度末には、「言語記述研究会」のメンバーの論考を集めた、『記述言語論集1』を出版した。

【インダス言語研究会】

インダス言語研究会は、長田俊樹、大西正幸、森若葉、



児玉望、高橋慶治の5名に、物質文化研究グループの寺村裕史が加わり、2ヶ月に一度のペースで開かれている。メンバーの専門は下の通りである。

長田俊樹（ムンダ諸語、インドアーリヤ諸語、記述言語学、言語類型論）
大西正幸（インドアーリヤ諸語、記述言語学、言語類型論）
森 若葉（シュメール語、文字論）
児玉 望（ドラヴィダ諸語、音韻論、記述言語学）
高橋慶治（チベットビルマ諸語、記述言語学、言語類型論）
寺村裕史（考古学、文化財科学、GIS（地理情報システム））

研究会では、それぞれが専門とする言語の文法記述に関する発表と検討の他、南アジアの言語／記述言語学／言語類型論が専門の研究者を随時招いて、情報交換を行なっている。

また、今年度は、ほぼ毎回、寺村に加わってもらい、『南アジア言語地図』（英語版）の地図や原稿の検討を行った。各語族や個別言語の分布を示す地図／原稿の他、少数言語地域の言語の分布、大都市における言語分布、年度別地域別の話者人口の変遷など、社会的／歴史的な情報も加えることにし、内容的に次第に充実したものとなってきている。作成作業は着実に進んでおり、2009年度後半の出版を目指している。

研究会の開催日時および内容は下の通りである。

第4回 2008年4月5日（土）12:30 - 17:00（地球研）

研究発表

下地理則「伊良部島方言の語の認定：アップデート」

児玉 望「テルグ語簡易文法をめぐって」

「南アジア言語地図」検討会(1)

第5回 2008年5月24日（土）13:30 - 17:00（地球研）

研究発表

児玉 望「テルグ語簡易文法（続）」

長田俊樹「南アジアの地域特徴」

「南アジア言語地図」検討会(2)

第6回 2008年7月19日（土）13:00 - 17:00（地球研）

研究発表

千田俊太郎「Some issues in reconstructing Proto-Simbu tones」

「南アジア言語地図」検討会(3)

第7回 2008年10月4日（土）13:30 - 17:00（地球研）

研究発表

北田 信「辺境の歌～ベンガル語の中世文学と口承文芸」

「南アジア言語地図」検討会(4)

第8回 2008年11月8日（土）13:30 - 17:00（地球研）

「南アジア言語地図」検討会(5)

第9回 2008年1月9日（金）13:30 - 17:00（地球研）

研究発表

萬宮健作「スィンディー語をめぐって」

第10回 フィールドリサーチセミナー「文明と文字：記憶 vs. 記録」

(熊本大学大学院社会文化科学研究科との共催)

2009年3月14日(土) 14:00-17:00 (放送大学熊本学習センター講義室)

(1) 長田俊樹「記録なき文明の解明」地球研インダス・プロジェクト 2008 調査報告

(2) 児玉 望「非文字説と文明の継承」インダス「文字」解読の動向

(3) 北田 信「放浪者の言語」吟遊詩人バウルの口承とチャリヤーパダ文献

(セミナーの内容については、本報告書、111-128 頁を参照のこと。)

【言語記述研究会】

言語記述研究会は、長田俊樹、大西正幸、森若葉の他、少数言語の記述を専門とする10名の若手研究者が主要メンバーである。この研究会は、2007年4月より、毎月1度のペースで開かれ、言語記述の方法論や言語類型論をめぐる議論を積み重ねてきた。また、会のメンバーは、「インダス言語研究会」や、下で述べる講演会の運営にも、積極的に参加してきた。また、上に述べたように、今年度は、大西と稲垣の共同編集による『記述言語論集1』を刊行した。また、寺村／稲垣の協力により、ホームページの内容が徐々に充実して来ている。研究会の開催日時および内容は下の通りである。

第8回 2008年4月3日(木) 14:30-17:00 (地球研)

研究発表

林 由華「琉球語のコンパクトな文法を書くために」

下地理則「伊良部島方言の語の認定：アップデート」

第9回 2008年5月22日(木) 14:30-17:00 (地球研)

研究発表

富田愛佳「『車里訳語』編纂当時の雲南漢字音子音の特徴」

第10回 2008年6月19日(木) 14:30-17:00 (地球研)

研究発表

林 範彦「Verb Serialization in Youle Jino」

第11回 2008年7月17日(木) 14:30-17:00 (地球研)

研究発表

野島本康「ブヌン語の動詞連続」

第12回 2008年10月2日(木) 14:30-17:00 (地球研)

研究発表

野島本康「Bunun prefix makis-/pakis- "to request, ask for": an evidence for PAN *makiS-/pakiS-」

論集に向けての打ち合わせ

第13回 2008年11月6日(木) 14:30-17:00 (地球研)

研究発表

大西正幸「Gender Marking in Nasioi, Motuna and Buin」

論集に向けての打ち合わせ

第 14 回 2008 年 12 月 18 日 (木) 14:30 - 17:00 (地球研)

論集打ち合わせ／掲載論文の検討

第 15 回 2009 年 1 月 15 日 (木) 14:30 - 17:00 (地球研)

論集打ち合わせ／掲載論文の検討

第 16 回 2009 年 2 月 20 日 (金) 14:30 - 17:00 (地球研)

論集打ち合わせ／掲載論文の検討

【講演会】

今年度は次の講演会を開催した。

国際ワークショップ「歴史言語学の現在」

2008 年 6 月 20 日 (金) 13:00-16:30 (京大会館 211 号室)

(1) ジェラルド・ディフロス (東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所客員教授)

「オーストロアジア語族の故地について」*'On the urheimat of Austroasiatic'*

(2) ニコラス・エヴァンス

(オーストラリア国立大学・太平洋アジア研究所言語学科・主任教授)

「現存の言語から古代文字を読み解く」*'How living languages can unlock ancient scripts'*

(3) アレクサンダー・ヴォヴィン (ハワイ大学東アジア言語文学科教授)

「日琉祖語 (ないし日琉語以前の言語) と他の言語の間に、どのような言語接触があったか」*'On possible contacts with pre- or/and proto-Japonic'*

なお、講演会の内容については、『インダス・プロジェクト ニュースレター』第 4 号、本報告書 199-200 頁を参照のこと。

(文責 大西正幸)